

【研究ノート】

剣道を専門種目とする初任教师教育者のセルフスタディ
—— アスリートアイデンティティと教育者アイデンティティの連関 ——

濱本 想子

Self-Study by a Novice Teacher Educator Who Specializes in Kendo
—— The Link between Athletic Identity and Educator Identity ——

HAMAMOTO Aiko

要旨

本研究は、アスリートアイデンティティと教育者アイデンティティの連関について考察する、剣道を専門種目とする初任教师教育者である筆者（濱本）によるセルフスタディである。研究の手続きとしては、本セルフスタディに関する体育科教育学と教師教育学を専門とするクリティカルフレンドとのやり取りや非構造化インタビューの記録を文字化し、ナラティブとしてまとめた。その結果、濱本には幼少期の剣道や被教育の経験及び多様な他者との出会いからアスリートアイデンティティや教育者アイデンティティが形成されていること。また、それらアイデンティティは、経験の蓄積や立場の変化、そして専門性の向上に伴い、徐々に接近してきたこと。そして、教師教育者となったことで両アイデンティティが統合し、体育科教育者としてのプロフェッショナル・アイデンティティへと発達したことが明らかとなった。また、濱本はこのセルフスタディを通して自己のアスリートアイデンティティと教育者アイデンティティを見つめ直し、その関係性を考察することで、両アイデンティティを統合させることの重要性を認識することができた。体育教師や体育教師教育者は、運動・スポーツの専門家でもあり、教育の専門家でもある。両専門性をいかに結びつけるか、体育教師を育てる体育教師教育者としての課題も明らかとなった。

キーワード：剣道、教師教育者、体育、アイデンティティ、セルフスタディ

I. 研究の背景と目的

1. 研究の背景と問題の所在

「なぜ、あなたは体育教師になりたいのですか。」

保健体育科教員養成において、多くの教師教育者（教師の教師）がこの問いを学生に投げかけているのではないだろうか。この問いに対し、体育教師を目指していた筆者の学生時代の答えを簡潔に示すと「体育が好きで、子どもたちに体育の楽しさを教えたいから」「（専門種目とする）剣道を教えたいから」の2つであった。1つ目は、体育教師を目指す動機として真つ当であろう。しかし、2つ目は運動部活動指導者を目指す動機である。

筆者が体育科教育学を専門とする教師教育者となった今、学生に同じ問いを投げかけると、多くの学生から筆者の学生時代と同じような答えが返ってきた。この時、ふと自己の学生時代の体育教師の志望動機も振り返り、「なぜ、学生は体育教師の志望動機を聞かれているのに、運動部活動指導者の志望動機を答えてしまうのか」と疑

問に感じたのである。

ところで、伊田（2005）が教職志望動機尺度を開発し、春原（2010）はその尺度をもとに教職志望学生の志望動機を調査しているが、その項目に部活動という言葉はない。一方、大石（2016）は体育学部の学生を対象に保健体育科教員志望動機を調査し、部活動や部活動指導者の影響が大きいことを明らかにしている。つまり、運動部活動指導者が志望動機に挙がるのは、体育教師を目指す学生の特徴であると考えられる。なお、体育教師の仕事は、その他の教師同様に、「校務分掌（とりわけ、生徒指導）」「学級経営」「管理職」など（例えば、岩田ほか、2012；松田、2010）と多岐にわたることは言うまでもないであろう。しかしながら、実際には運動部活動の指導に傾倒している体育教師は多い（須甲・四方田、2013）。さらに、学校文化や教員文化に起因する体育教師へのステレオタイプ的な役割期待がなされており、体育教師の体育授業と運動部活動という二重性については体育教師

教育において問題視されている（久保，2002；須甲・四方田，2013）。

2020年9月1日に開催された「第4回学校における働き方改革推進本部」（文部科学省，online）より部活動改革案が提示され，部活動を学校単位から地域単位の取組みとする旨が示された。この改革が推進されると，制度上，多くの体育教師がこれまでよりも部活動指導から離れることが予想される。また，背景にある「学校における働き方改革」の目的として，「教師が我が国の学校教育の蓄積と向かい合って自らの授業を磨く」ことや「子供たちに対して効果的な教育活動を行うことができるようになる」ことが挙げられている。そのため，今後は教師の専門性として教科指導力により一層の焦点が向くと考えられる。もちろん，体育教師も然りである。では，体育教師を志望する学生の運動部活動指導をしたいという動機は，軽視して良いだろうか。

ここで，上記の動機が生まれる背景として，近年，教師教育において注目されているアイデンティティという概念に着目したい。1950年代にエリクソンによって提唱されたアイデンティティという概念は，広辞苑（第6版電子辞書）では「ある人が一個の人格として時間的・空間的に一貫して存在している認識をもち，それが他者や共同体からも認められていること」（新村，2008）と説明されている。アイデンティティの形成においては，経験や出来事，学業などの活動が影響を及ぼし（萩原ほか，2020；渡邊，2020），「自己の存在の他に他者の存在，しかも自分の中に内的に取り込まれる重要な他者の存在」（川本，2015，p.210）が必要である。また，エリクソンはアイデンティティの形成を青年期の重要な発達課題として挙げているが，青年期で完了するのではなく生涯にわたって発達するものとしてライフサイクルの視点から捉えている（エリクソン，1973）。小沢（2020，p.105）は，「自分が生きていることの基盤であるアイデンティティを認識していながら，納得できないという点で揺らぐこと」を「自分への問いかけというアイデンティティ危機」とし，自己理解に寄与するものと言及している。そして，キャリアトランジションが起こる段階，特に青年期の終わりにはこのアイデンティティ危機が訪れやすい（エリクソン，1973）。

上述したようなアイデンティティの概念の中には，職業についての自己の位置付けをさす職業的アイデンティティ（occupational identity/vocational identity）があり，その形成や発達には自己のアイデンティティの形成や発達に重要な役割を果たす（波多，2018；吉津，2001）。なお，一定の資格を有する専門家の場合には，専門家アイデンティティ（professional identity，プロフェッショナル・アイデンティティ）と区別されるこ

ともある（前田，2009；宮下ほか，1984）。教職において，欧米では教師の場合はteacher identity，学校や大学で教師を教える教師の立場にある教師教育者の場合はteacher educator identityとして研究が蓄積され，両アイデンティティは区別されつつも，その繋がりや発達の過程についても検討されている（e.g., Beauchamp and Thomas, 2009；Izadinia, 2014；Swennen et al., 2010）。日本では，教職アイデンティティとして注目を浴びているが（久富，2008），主な対象は教師であり，教師教育者に焦点が当てられていない。それは，日本において教師教育者という概念の認知度が低いこと（岩田ほか，2018）が影響していると考えられるが，教師や教師を目指す学生もいずれ教師教育者になる可能性があり，教師教育者のアイデンティティは教師のアイデンティティから発達する事例が多い（Izadinia, 2014）。そこで，アイデンティティ形成が一過性ではなく，生涯にわたって発達するものであることから，本研究では教師及び教師教育者を総括して教育者として捉え，そのアイデンティティを教育者アイデンティティ（educator identity）と称して，包括的に捉えることとした。なお，教師及び教師教育者のアイデンティティをそれぞれ強調する際には，意図的に区別をして論じていくこととする。では，教員養成課程の学生に目を向けると，アイデンティティの形成が学生の行動から教育者としての専門性の発達まで方向付けることが示されている（Bullough, 2005）。そして，経験や学業がアイデンティティ形成に寄与することから（萩原ほか，2020；渡邊，2020），学生の教育者アイデンティティの形成には，これまでの被教育経験や教員養成課程での学びなどが影響を及ぼすと考えられる。

一方，体育教師を目指す学生の多くは，幼少期から何らかのスポーツに励み，スポーツクラブや中学校及び高等学校，そして大学の部活動まで，競技生活を続けているものが多い。そのため，アスリートとしてのアイデンティティ（以下，アスリートアイデンティティと明記）を保持していると考えられる。アスリートアイデンティティは，アスリートの役割として認識している自己であり，その確立には他者からの承認の程度も影響する（Brewer et al., 1993）。また，萩原ほか（2020）は「競技スポーツを行う社会的集団に所属すること，またその集団の成員として認められることによって確立する自己」（p.184）と定義している。アスリートアイデンティティの形成について，研究は蓄積されている（Brewer et al., 1993；Brewer and Petitpas, 2017；Horton and Mack, 2000；小島，2008）。しかし，エリクソン（1973）の理論に基づきアスリートアイデンティティについて検討している小島（2008）は，アスリートのアイデンティ

ティ形成とその再体制化に関わるキャリアトランジションの重要性と困難さを唱えている。体育教師を目指す学生にとって、教員養成課程はアスリートとしてのキャリアトランジションの重要な局面であろう。

体育大学生を対象とした大石（2015）の研究では、競技力が高くスポーツマンとしてのアイデンティティを持つ学生の方が、体育教師の志望動機や興味が、競技力の高さゆえに周囲に体育教師を勧められ、その意見に影響されて同調する形で体育教師を志望する傾向にあることが明らかにされている。大石の研究は、質問紙調査を通してアスリートアイデンティティと教職志望動機の関係について数量的に検討している点に意義があると言える。しかしながら、具体的なアスリートアイデンティティやその形成の契機については明らかにされていない。また、教職志望動機に着目していることから、その動機がどのように教育者としての専門性開発の基盤をなす教育者アイデンティティの形成につながるか（つながっているか）については、検討されていない。加えて、体育教師を志望する学生は、多かれ少なかれアスリートアイデンティティと教育者アイデンティティを保持していると考えられるが、それらの関係性について解明を試みた研究は管見の限りない。

2. 研究の目的

そこで本研究では、剣道を専門種目として長年続け、教師の経験を経て教師教育者となった筆者（以下、濱本と明記）のアスリートアイデンティティと教育者アイデンティティ、そしてその連関について、クリティカルフレンドとのセルフスタディを通して詳細な解明を試みる。そして、本事例を通して、体育教師を目指す学生及び体育教師のアスリートアイデンティティと教育者アイデンティティの統合の可能性を明らかにしたい。

II. 研究の方法

1. セルフスタディとは

現在、日本ではセルフスタディの定義について議論がなされているが、教師や教師教育者などの実践家が自己の研究を共有したり実践を発展させたりするための教師教育における新しい研究手法の1つと言えるであろう（岩田ほか、2019；Ovens and Fletcher, 2014）。1990年代以降に欧米で広まったセルフスタディは、近年、日本でもその実践や研究が蓄積され始め（例えば、金・弘胤, 2018；岡村, 2019；小柳, 2018）、書籍『J. ロックランに学ぶ教師教育とセルフスタディ』（ロックラン, 2019）が発行されるなど、徐々に広がりを見せている（ロックラン, 2019, p.199-201）。

一般的に、教師のセルフスタディは教師自らの実践の改善に留まることが多い。しかしながら、セルフスタ

ディは「教えること、教えることを教えること、教えることを学ぶこと」（Loughran, 2004, p.30）に関する研究方法論及び研究ジャンルであり、自己の経験や教育活動に焦点を当ててナラティブな視点から状況を分析することで、新たな問題を提起することができる（金・弘胤, 2018）。そこで、本研究では自己のスポーツ・体育の経験や教育活動に焦点を当てて、その経験や活動が析出される内面的な語りの視点から、アスリート及び教育者アイデンティティの形成がなぜ惹起されたのか、また、それらがいかに関連しているのかを分析的に記述していく。

2. セルフスタディの実践者とクリティカルフレンド

セルフスタディの実践者となすためには、個人でその対象となる実践と研究を進めることが前提である。濱本は、体育科教育学及び教師教育学を専門とする大学教員であることから、セルフスタディの実践者として個人で実践と研究を進めることができる。なお、濱本の剣道歴や教育歴については、後述することとする。また、セルフスタディを進める上では、必ず実践と研究を批判的に振り返るために「批判的友人」の存在が必要である（Schuck and Russell, 2005）。さらに、Costa and Kallick（1993）は全ての教育者にとって、刺激的な質問を投げかけ役立つ批評を提供する信頼できる人の必要性を説いている。欧米では、この存在が、critical friendsやcritical colleaguesという英語表記で表現されているが、本研究では、クリティカルフレンドとカタカナ表記をすることとした。

本研究では、濱本のアイデンティティを引き出すために、濱本とラポールが形成されている大学教員X（以下、X氏と明記）をクリティカルフレンドとして共同的な立場でデータを収集していった。X氏は、濱本と同じ大学出身で、博士課程前期の修了後には中・高等学校で保健体育科教師として教鞭をとっていた。その後、博士課程後期に在籍しながらも、高等専門学校や専門学校で体育授業を実施していた。そして現在は、国立の大学教員として働いて15年目となる。専門は、体育科教育学と教師教育学である。また、X氏と濱本の出会いは、濱本が大学に入学した頃に遡ることができ、濱本のチューター兼ゼミ指導も担当していた。そのため、濱本とX氏の間には、ラポールが十分に形成されており、本研究を進める上で適切なクリティカルフレンドとして協力を依頼した。

3. 収集したデータと分析

本研究では、2020年9月から10月にかけて、本研究に関するX氏とのやり取りの記録として、ミーティングの議事録やメールの内容を蓄積した。また、濱本のアイデンティティを引き出しその関係性を探るために、X氏による非構造化インタビューが3回（2020年9月8日・13日・24日、それぞれ40分ずつ）実施された。非構造化イ

インタビューの目的は、引き続き行われるインタビューの質問を定型化するためある事例についての十分な知識を得ることであり、このアプローチを通して事例に対する洞察と理解を得ることができる(メリアム, 2004)。本研究では、アスリートアイデンティティと教育者アイデンティティの関係についてこれまで研究の蓄積がなされていないことと、濱本の事例に対して深い洞察と理解を得るために、このアプローチを用いることとした。なお、非構造化インタビューのインタビュアーには熟練が求められるが(メリアム, 2004)、X氏はこれまで体育科教育学や教師教育学の研究においてインタビュアーとして数多くの調査を行っており、その熟練度は十分である。インタビューのデータは、その内容を文字化した。そして、本研究に関するX氏とのやりとりやインタビューの記録から、①アスリートアイデンティティ、②教育者アイデンティティとその形成の契機を抽出した。さらに、収集したデータに対するナラティブな分析を通して、両アイデンティティの連関を検討することとした。

III. 濱本に関連する2つのアイデンティティの形成

近年、教師や教師教育者の専門性として知識や技能だけでなく、アイデンティティが重要視されており、教育者アイデンティティ(educator identity)をいかに自覚するか、いかに形成していくかについて、専門性開発の視点から注目されている(久富, 2008; ロックラン, 2019)。とりわけ、体育教師であれば、教育者アイデンティティや運動・スポーツに従事してきた経緯からいえばアスリートアイデンティティ(athletic identity)を保持していると思われる。濱本の事例をもとに、両アイデンティティとはそもそもどのように捉えていくべきであるかについても探っていく。なお、本研究ではアイデンティティに着目するため、以降に示す専門性という用語は主に専門的な知識や技能の意味で用いる。

1. アスリートアイデンティティ

濱本は、剣道を6歳から初め、幼少期から成人期まで様々な人との出会いの中でアスリートアイデンティティを形成してきた経緯がある。そこで、X氏とのインタビューを通して想起された、濱本のアスリートアイデンティティ形成とその契機について検討していく。

まず、濱本の剣道歴について概説する(表1)。濱本は、小学校1年生の時に地域のスポーツクラブ(以下、道場と明記)で剣道を始め、中学校、高等学校、大学まで剣道部に所属した。各段階において全国大会に出場するなど、競技成績を残すことができた。そして、大学院に進学した際には所属大学の剣道部と県の小中学生強化チームの指導員を務めた。

表1 剣道歴

年代	所属	立場
小学生	道場	競技者
中学生	道場	競技者
	部活動	競技者
高校生	部活動	競技者
大学生	部活動	競技者
大学院生	部活動	競技者・指導者
	小中強化チーム	指導者

次に、濱本のアスリートアイデンティティ形成とその契機についてX氏とのインタビューの内容から論述する。濱本は、自己の剣道への関わり方として、大学の剣道部引退までを競技者、それ以降を指導者として認識している。そこで、X氏に「大学生段階での競技引退が、アイデンティティ危機とならなかった理由」について尋ねられた。この質問に対する濱本の回答は、以下の通りである。

確かに、大学の部活動引退時には長かった競技人生が終わったなと思いました。競技人生というより、部活人生が終わったと言ったほうがいいかもしれません。そして、今後も指導者や競技者として自主的に剣道を続けていきたいと思っていました。つまり、部活動は引退しても、剣道から引退したとは思っていなかったからだと思います。

(2020年9月8日インタビュー記録より)

続けて、X氏に「なぜ大学の部活動引退後も剣道を続けようと思ったのか」と問われた。その問いに対する濱本の答えは、以下の通りであった。

そもそも、小学校の頃から一度も剣道を辞めたいと思った事はありませんでした。剣道家としてのアイデンティティは、今思えばこの頃からあったのかもしれませんが、長らく競技生活を続けていたので、辛かったことも多々ありましたが、家族が応援し続けてくれたこともあって、大学まで続けることができました。一緒に剣道をやってきた兄妹や仲間の存在も大きかったですね。どの段階において、みんなの頑張りは励みになりました。また、私が携わってきた多くの剣道の先生は、指導者でありながら、成人の部で大会に出場され続けていました。そのような先生方を尊敬していましたし、そのような剣道の先生になりたいと思っていたので、剣道を辞めるという考えには至りませんでした。良い家族、仲間、指導

者に恵まれていたのだと思います。

(2020年9月8日インタビュー記録より)

さらに、X氏は「なぜ、大学院生時代は指導者として剣道に携わることにしたのか」と問うた。濱本の答えは、以下の通りである。

まず、大学の部活動の指導者も、県の小中学生強化チームの指導者も、関係者から依頼を受けました。前に述べたように、剣道の指導をしたいと思っていたので、とても良い経験になると思って引き受けました。この指導者の経験を通して、これまでただがむしゃらに取り組んできた剣道について、指導の仕方はもちろん、その魅力や特性をより客観的に捉えるきっかけとなったと思います。

(2020年9月8日インタビュー記録より)

以上のように、主にインタビューの内容から濱本のアスリートアイデンティティ形成とその契機を素描してきた。そもそも、自己の中にアスリートとしてのイメージが高いレベルにあるアスリートは、スポーツへのコミットメントが高いレベルにあることが示されている (Horton and Mack, 2000)。しかし、スポーツへのコミットメントが高まると、生活の他の側面をおろそかにする可能性についても言及されている。さらに、アスリートアイデンティティが高く、生活の他の側面を軽視しているアスリートの多くは、人生の他の領域の目標に対してネガティブな結果を引き起こす可能性が指摘されている (Horton and Mack, 2000 ; Poucher and Tamminen, 2017)。

濱本の場合は、競技者を引退し指導者となる際にキャリアトランジションがなされたが、「一度も剣道を辞めたいと思った事はありませんでした」「剣道から引退したとは思っていなかった」という発言から、剣道家としてのアスリートアイデンティティを保持し続けることができている。それは、様々な人との関わりの中で競技者としても指導者としても自己の役割を認識し、他者にも受け入れられてきたことが要因だと考えられる。

2. 教育者アイデンティティ

本研究では、教師及び教師教育者としてのアイデンティティをまとめて教育者アイデンティティとして捉えている。そこで、X氏とのインタビューを通して想起された、濱本の教師としてのアイデンティティ及び教師教育者としてのアイデンティティに着目しながら、教育者アイデンティティの形成とその契機について整理をしていく。

濱本が体育教師になりたいと思ったのは、小学生の頃である。その理由は、「体育が好きだから」である。中

学校に入ると、「体育の先生が好きだから」という理由も加わった。そして、高校時代には希望する大学への進学に向けて勉強と部活動に励んだ。大学に入学した当初は、学部卒業後すぐに教師になりたいと思っていたが、3年生の頃からより専門性を高めたいと思い、大学院への進学を意識し始めた。そして大学院の修士課程に進学し、体育科教育学を学んだ。また、教育経験を積むためにも、修士課程の2年間は中学校保健体育科の非常勤講師を務めた。しかし、修士課程1年生の後半から、博士課程への進学を考え始めた。そして、博士課程に進学し、体育教師になることをやめ、大学教員となった。

以上のような経緯を踏まえ、X氏から「教師及び教師教育者としてのアイデンティティが芽生えた時期とその理由」を問われた。濱本の答えは、以下の通りである。

教師としてのアイデンティティが芽生えたのは、高校時代だと思います。高校時代は、体育授業や初心者が多かった部活動で友達に教える機会が多く、教えることの楽しさとか難しさを経験しました。この頃から、将来は体育教師をしながら、剣道部の指導をしたいとより強く思うようになっていました。あと、この頃は特に体育教師になりたいと先生や親、友達にも言いふらしていました。周りからは「似合ってるよ」「いい先生になれるよ」とか言っていたので、今思えば勝手に変な自信を持っていたなと思います。そして、大学での勉強や教育実習、大学院での非常勤の経験を経て、徐々にそのアイデンティティは強固になってきたと思います。

また、教師教育者という存在を意識し始めたのは、修士課程に入ってからですね。そのきっかけは、指導教員です。私の指導教員は、大学での教員養成だけでなく、校内研修など現職教育にも積極的に携わっていました。学部生時代には、指導教員の教師教育者としての仕事について注視したことはありませんでしたが、院生となって指導教員の仕事を間近で見ようになり、先生を教える先生の存在と、その面白さに気付いて、あれだけ体育教師になりたかったのに、大学教員を目指すことを決めました。また、教師教育者としてのアイデンティティが芽生え始めたのは、博士課程に進学して、指導教員と共に主体的に教員養成や現職教育、そして研究に取り組んだ頃からだと思います。教師教育者という仕事の面白さと大変さに気づきました。

(2020年9月13日インタビュー記録より)

これまで、主にX氏とのインタビューの内容から濱本の教育者アイデンティティの形成とその契機を素描してきた。そもそも、「教師教育者 (teacher educator)」とは、教師を育てる教育者、いわゆる「教師の教師」で

あり、「教員養成や現職教育に、そして高等教育機関や各種学校において公式に従事している人々」(Swennen and Van der Klink, 2009, p.3)を指す。また、教師教育者は、児童・生徒に教える第一次教育 (first order teaching) から、教えることを教える第二次教育 (second order teaching) へ、役割とアイデンティティを移行させる (Murray and Male, 2005 ; Swennen et al, 2010)。この指摘と同様に、濱本は教師から教師教育者としてのアイデンティティへと移行し、自己の教育者アイデンティティを形成してきた。加えて、その過程で、高校の恩師や大学の指導教員などの存在が「明示的なモデリング (explicit modelling)」(Loughran and Berry, 2005)として濱本の教育者アイデンティティの形成に影響を及ぼし、成長を促したのであろう。なお、教師教育者のセルフスタディは、学者として新たな知見を生み出すために研究されなければならない (Lunenberg et al., 2011)。そういった意味でも、大学に勤務したばかりの濱本は、そのキャリアトランジションの中で、初任の教師教育者として研究も蓄積しながら自己の実践意味を研究から価値づけしようとしていることがわかる。

以上より、濱本の教師としてのアイデンティティは高校時代に芽生え、大学での学びや非常勤の経験を通して徐々に強固になっていった。しかし、教師教育者である指導教員との出会いを通して徐々に教師教育者としてのアイデンティティへと移行させていったことが分かる。なお、図1に濱本のアスリートアイデンティティと教育者アイデンティティの形成とその契機を示した。

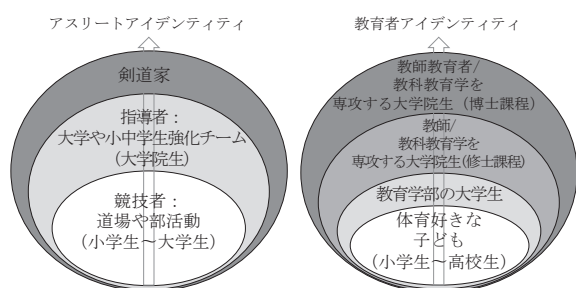


図1 アスリートアイデンティティと教育者アイデンティティの形成とその契機

IV. アスリートアイデンティティと教育者アイデンティティの関連

これまで、濱本のアスリートアイデンティティ及び教育者アイデンティティの形成とその契機について整理してきた。その結果、濱本は、部活動の引退後 (つまり、競技終了後) も幼少期より形成されてきた剣道家としてのアスリートアイデンティティを保持し続けつつ、教師、

そして教師教育者というキャリアとそれらの新たなアイデンティティへとつなげることができていることが明らかとなった。アスリートの競技引退は、アイデンティティ危機を引き起こし、次なるキャリアへの移行を妨げる場合がある (豊田・中込, 2000)。一方、Coakley (1983, p.1)は競技引退を「競技スポーツへの参画から別の活動へ移行するプロセス」として、その局面をポジティブに捉えるよう主張している。濱本のアスリートから教育者への移行は、Coakleyが示すようなポジティブな移行の事例であると言えよう。では、この結果に対するX氏の2つの疑問から、いかに両アイデンティティ間の連関が起こったのか、その契機について言及していく。

1つ目の疑問は、「なぜ、教育現場で剣道の指導をしたと思ったのか」である。これに対し、濱本の答えは次の通りである。

高校生の時、剣道をやっていた別の学校の友達や知り合いの多くが、「もう剣道はやらない」「もう剣道はやりたくない」と言って、部活の引退と同時に剣道を辞めました。(中略)このような経験もあって、子どもたちが部活動で燃え尽きて剣道やスポーツをやめないようにしたいと思って、そのように思いました。

(2020年9月24日インタビュー記録より)

この語りから、濱本が高校生の頃から教育者アイデンティティを確立し始めており、部活動の影響でスポーツからバーンアウトをする生徒を無くしたいと強く思っていたことが分かる。また、特に剣道は生涯を通して修行を行い、精神面や身体面、技術面の向上を目指すことができることに魅力がある (全国教育系大学剣道連盟, 2014)。そのような特性を持つ剣道を専門種目としていても、濱本がアスリートアイデンティティを保持し続けつつ、教育者としてその魅力を伝えていきたいという思いを持つことができた要因として考えられる。X氏の2つ目の疑問は、「アスリートアイデンティティと教育者アイデンティティが近づいた場面はどこか」である。これに対する濱本の回答は、次の通りである。

学部生の頃までは、体育は授業で、剣道は部活でそれぞれ指導したいと思っていただけで、繋がりはあまりありませんでした。ただ、徐々に剣道家、教育者としての専門性が高まり、今思えばそれぞれのアイデンティティが確立していく中、教師教育者としてのアイデンティティが芽生え始めた修士・博士課程の頃にその距離が徐々に縮まってきたと思います。そして、体育科教育に携わる者として、剣道で学んできたことを教育に、教育で学んできたことを剣道に活かしたいというか、活かす

べきだなと思うようになりました。

(2020年9月24日インタビュー記録より)

この回答に対して、X氏はさらに「剣道と教育で学んできたことを、どう相互に活かせると思っているか」と問うた。この問いに対する濱本の回答は、次の通りである。

剣道を通して学んだことは、競技者の経験から、体感してきた剣道の魅力、身についた知識や技能、課題解決力、コミュニケーション力などがあります。また、指導者の経験からは、指導力、観察力、練習の設計・運用力などがあります。これらは、体育科教育や体育教師教育に活かすことができると思います。また、体育科教育で学んだこととしては、教育や体育の理論、運動やスポーツに関する科学的知見、子どもの発育・発達などの知識、効果的な教授方法などです。これらは、剣道の指導や実践に活かすことができると思います。ただ、このように思うことができたのは、最近です。つまり、剣道と教育に関する専門性が上がったことで、両方を俯瞰して考えることができ、つなげることができるようになったと思います。また、教師教育者となった今、より一層の専門性の向上が求められる中、この研究に取り組むことで、体育教師教育者として剣道や教育の知識や技能だけでなく、両アイデンティティを関連させることの重要性について気づきました。

(2020年9月24日インタビュー記録より)

これまでの結果を踏まえ、濱本のアスリートアイデンティティと教育者アイデンティティの関係性についてまとめていく。濱本は、教師教育者としてのアイデンティティが芽生えた頃を契機に、別のベクトルに向いていたアスリートアイデンティティと教育者アイデンティティを統合させることが出来たと言える。つまり、アスリートアイデンティティと教育者アイデンティティが重なった、新たな体育科における教育者（以下、体育科教育者）としてのアイデンティティ、さらに強調して言えば、体育科教育者としてのプロフェッショナル・アイデンティティを形成し、自覚することができたと言える。プロフェッショナル・アイデンティティは、これまでの経験や社会との関わり、ロールモデルやメンター、経験学習、知の獲得など、長い経過を通じて形成されると言われている（宮田，2015）。さらに、宮田は医療専門職のプロフェッショナル・アイデンティティの形成について、Cruess et al. (2014) の知見を踏まえて以下のように述べている。「医療専門職としての特性、価値観、規範が内在化されて自我を獲得し、学習者が“医師らしく考え、行動し、感じる”ようになり、社会から求められ

る“良い医師”となる。これがプロフェッショナル・アイデンティティ形成である」（宮田，2015，p.131）。専門職である教師においても、このプロフェッショナル・アイデンティティの形成過程を当てはめることができるだろう。濱本の場合は、アスリート、教師、そして教師教育者へとキャリアトランジションが起こる中、剣道家及び教育者としての多様な経験や学び、ロールモデル（例えば、剣道の指導者や指導教員など）との出会いなどの影響を受け、両アイデンティティを俯瞰することができた。そして、アスリート及び教育者アイデンティティを統合させた“良い体育科教育者”としてのプロフェッショナル・アイデンティティを形成、自覚することができたと言える。

以上を踏まえ、濱本のアスリートアイデンティティと教育者アイデンティティの連関を図示した（図2）。剣道家及び教育者としての立場の変化、専門性の向上、アイデンティティの形成過程をベクトルで示した。また、剣道家及び教育者として立場が変わる中で、それぞれの専門性が向上し、アイデンティティが確立されるにつれて、徐々に両アイデンティティのバランスが良くなっていくことを示している。中心のベクトルは、これまでの経験や学びを経て教師教育者となり、別の方向に向いていたベクトルの均衡が取れ、それらを統合させた体育科教育者としてのプロフェッショナル・アイデンティティへと発達させることができたことを明示している。なお、この濱本の体育科教育者としてのプロフェッショナル・アイデンティティの発達には、アスリート及び教育者としての各段階で、自己及び他者の承認を得ることができていたことが重要である（エリクソン，1973；川本，2015）。しかしながら、“体育科教育者”としての成長に関しては今後の教育実践や研究、そして、社会貢献といった経験の中から育まれるものであるため、引き続き検討が必要である。

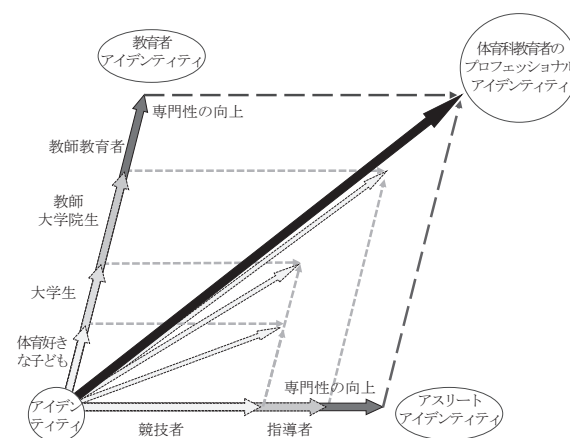


図2 アスリートアイデンティティと教育者アイデンティティの連関

V. 本研究の意義と今後の課題

本研究では、筆者のセルフスタディを通してアスリートアイデンティティ及び教育者アイデンティティとその関係性を探求し、統合の可能性を明らかにすることを目的とした。その結果、剣道を競技者として長らく続けてきた筆者は、大学の部活動を引退してからもアスリートアイデンティティを保持しつつ、徐々に教育者アイデンティティとの均衡がとれてそれらの関係性を深めること、統合させることができたことで、体育科教育者としてのプロフェッショナル・アイデンティティへと発達させていることが明らかとなった。

しかし、筆者自身がそうであったように、大学生時代は、体育教師と部活動指導者を同一視していながらも、それぞれの専門性とアイデンティティのベクトルは別の方向を向いていた。そのため、教職志望動機に部活動指導者が挙げたのだろう。須甲・四方田(2013)は、日本の体育教師にとって、被教育者としての経験を通して培われた運動部活動指導者としての教師観から、体育の授業者としての教師観を形成することは容易ではないと述べている。しかし、筆者はアスリートアイデンティティと教育者アイデンティティを高め、それらを統合させることができた。その要因としては、剣道家としても教育者としても、各段階で自己の役割を認識し、多くの他者に支えられ、認められながら目標に向かうことができたことが挙げられる。もし、剣道の指導者らに出会う機会もなく、アスリートアイデンティティが他者に認められていなければ、教育者アイデンティティに傾倒していただろう。もし、指導教員らに出会う機会もなく、教育者アイデンティティが他者に認められていなければ、アスリートアイデンティティに傾倒していただろう(図3)。この図を例に、冒頭の「なぜ、学生は体育教師の志望動機を聞かれているのに、運動部活動指導者の志望動機を答えてしまうのか」という疑問に対する本研究の答えとして、「アスリートアイデンティティと教育者アイデンティティが乖離しているから」「アスリートアイデンティティと教育者アイデンティティのバランスが偏っているから」の2つを挙げることができる。

以上を踏まえ、本研究ではアスリートアイデンティティと教育者アイデンティティの形成及びその契機とそれらの統合の可能性について、セルフスタディを通して分析的な記述をすることで詳細に示すことができた点に意義がある。また、本研究を通して具体的には以下の4つの示唆を得ることができた。(1)体育教師を目指す学生(もしくは、体育教師)には、アスリートアイデンティティと教育者アイデンティティが存在する可能性があること。(2)体育教師を目指す学生(もしくは、体育教

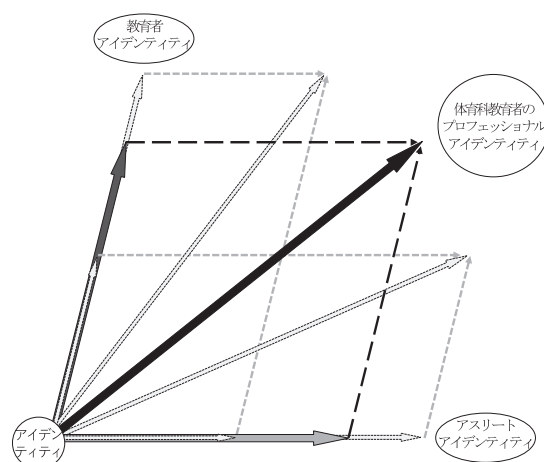


図3 体育科教育者のプロフェッショナル・アイデンティティの発達モデル

師)には、アスリートアイデンティティと教育者アイデンティティの偏りや乖離が起こる可能性があること。(3)アスリートアイデンティティと教育者アイデンティティの統合が促されれば、体育科教育者としてのプロフェッショナル・アイデンティティへと発達する可能性があること。(4)(3)のようなアイデンティティの発達には、アスリート及び教育者としての専門性の向上と、自己だけでなく他者からの承認が重要であること。

セルフスタディを通して得られた本研究の成果は、筆者自身の今後の剣道指導や教師教育実践に活かしたい。さらに、冒頭に示した筆者と同じような疑問を抱いている教師教育者らの実践や研究に活かされることを期待したい。なお、体育科教育に従事する教師や大学教員、それを目指す学生には、スポーツのアスリートとしての経験を有するものが多く、その経験はアスリートアイデンティティの形成に寄与すると考えられる。特に教員養成段階では、アスリートアイデンティティに傾倒している学生や、教育者アイデンティティが芽生えていない学生も存在すると考えられる。今後は、学生のアスリートアイデンティティを否定するのではなく、専門性開発の視点から学生がアスリート及び教育者アイデンティティをどれほど保持しているか、また、その自覚を促しながら両アイデンティティを認め、それらの統合を促すことが出来るような指導方略やその有効性も検討していきたい。

また、今後の課題として以下の4点を挙げる。1点目は、事例の蓄積の必要性である。本研究では、アスリートアイデンティティと教育者アイデンティティの連関について、筆者本人によるセルフスタディを通して詳細に示すことができた。しかし、あくまで事例的であるため、今後は学生や様々な年代の教師及び教師教育者らを

対象に事例を蓄積し、両アイデンティティの連関モデルをより緻密に解明していく必要がある。2点目は、アスリートアイデンティティや教育者アイデンティティに関するより詳細な分析の必要性である。本研究では、両アイデンティティの関係性に着目したため、各アイデンティティや新たに形成された体育科教育者としてのプロフェッショナル・アイデンティティについて詳細な分析はできなかった。今後は、それらの内実やアイデンティティ危機などのより具体的な契機についても迫っていききたい。3点目は、アスリートアイデンティティが形成されていない学生や教師、教師教育者に対する研究の必要性である。本研究では、体育科教育に従事する者に対して、アスリートアイデンティティが形成されていることを前提に論を進めた。しかしながら、中にはアスリートアイデンティティが全く形成されていない、自覚をしていない、もしくは極端にその比重が小さい者がいることも予想される。今後は、そういった者を対象に研究を行うことで、新たな体育科教育者の専門性や専門家像を見つけていくことが出来るかもしれない。そして4点目は、「保健」への着目の必要性である。体育教師は、体育授業だけでなく保健授業も担当するため、本来は保健体育教師と呼ばれるべきである。しかしながら、体育と比べ「保健」は教育現場で軽視され、学術的にも保健科教育学は体育科教育学から遅れをとっている（日本保健科教育学会、2017）。さらに、筆者が体育教師を目指していた頃に「保健」の視点がほとんどなかったことを踏まえ、本研究では意図的に体育教師や体育科教育という文言を用いた。なお、本研究を通して筆者は、保健体育教師を育てることのできる教師教育者（保健体育科教育者）としての役割に改めて気づくこともできた。そのため、今後は自身や学生、現場の教師や大学教員の保健体育教師、保健体育科教育者としてのアイデンティティについても研究に取り組んでいきたい。

謝 辞

本研究はJSPS科研費 JP20K02887の助成を受けたものです。

引用・参考文献

Beauchamp, C. and Thomas, L. (2009) Understanding teacher identity: an overview of issues in the literature and implications for teacher education. *Cambridge Journal of Education*, 39 (2) : 175-189.
 Brewer, B. W., Van Raalte, J. L. and Linder, D. E. (1993) Athletic Identity: Hercules' muscles or

Achilles' heel? *International Journal of Sport Psychology*, 24: 237-254.
 Brewer, B. W. and Petitpas, A. J. (2017) Athletic identity foreclosure. *Current Opinion in Psychology*, 16: 118-122.
 Bullough, R. V. (2005) The Quest for Identity in Teaching and Teacher Education. In: Hoban, G. (ed.) *The missing links in teacher education design: Developing a multi-linked conceptual framework*. Springer, pp.237-258.
 Coakley, J. J. (1983) Leaving Competitive Sport: Retirement or Rebirth? *Quest*, 35: 1-11.
 Costa, A. and Kallick, B. (1993) Through the Lens of Critical Friends. *Educational leadership*, 51 (2) : 49-51.
 Cruess, R. L., Cruess, S. R., Boudreau, J. D., Snell, L. and Steinert, Y. (2014) Reframing Medical Education to Support Professional Identity Formation. *Academic Medicine*, 89 (11) : 1446-1451.
 エリクソン：小此木哲吾訳編（1973）自我同一性—アイデンティティとライフサイクル—。誠心書房。
 Erickson, E. H. (1959) Identity and the life cycle. *Psychological Issues*, No.1. International Universities Press.>
 萩原悟一・Mariya A. YUKHYMENKO-LESCROART・下園博信・磯貝浩久・秋山大輔・神力亮太・大下和茂・萩原裕子（2020）日本語版学生競技者アイデンティティ尺度（AAIS-J）の作成。スポーツ産業学研究, 30 (2) : 183-193.
 春原淑雄（2010）親の要因，教職志望動機および教師効力感の関連—教員養成課程の新入生を対象として—。学校教育学研究論集, 21 : 1-10.
 波多幸江（2018）養護教諭の職業的アイデンティティ尺度の開発—関連要因の解明による養護教諭の職業的アイデンティティの発達に向けて—。学位論文，新潟大学。
 Horton, R. S. and Mack, D. E. (2000) Athletic identity in marathon runners: Functional focus or dysfunctional commitment? *Journal of Sports Behavior*, 23(2): 101-119.
 伊田勝憲（2005）教職志望動機測定尺度作成の試み—教師イメージ，個人的経験，理想とする教師像に着目して—。名古屋芸術大学研究紀要, 26 : 15-25.
 岩田昌太郎・加登本仁・松田泰定・木原成一郎・徳永隆治・林俊雄・久保研二・村井潤・嘉数健悟・林楠・藤本翔子（2012）保健体育科教師の悩み事に関する調査

- 研究. 学校教育実践学研究, 18: 151-158.
- 岩田昌太郎・草原和博・川口広美 (2018) 教師教育者の成長過程に関する質的研究—TAの経験はアイデンティティ形成にどのように影響を与えるか—. 日本教科教育学会誌, 41(1): 35-46.
- 岩田昌太郎・齊藤一彦・草原和博・川口広美 (2019) Becoming a Teacher Educator in Japan: 教師教育者の力量形成に資するワークショップ型研修の効果と self-study の観点から. 広島大学大学院教育学研究科共同研究プロジェクト報告書, 17: 17-26.
- Izadinia, M. (2014) Teacher educators' identity: a review of literature. *European Journal of Teacher Education*, 37(4): 426-441.
- 川本哲也 (2015) 成人形成期のアイデンティティと複数の社会的関係性の関連—養育者・友人・恋人に対するアタッチメント・スタイルの違いに注目して—. 発達心理学研究, 26(3): 210-224.
- 金鍾成・弘胤佑 (2018) 社会科教育学と歴史学におけるコラボレーションの意義と可能性—2人の大学院生により授業改善のセルフ・スタディー—. 日本教科教育学会誌, 40(4): 13-24.
- 小島一夫 (2008) あるアスリートのキャリアトランジションに伴うアイデンティティ再体制化について—生涯発達心理学の視点から—. 研究紀要, 14: 73-85.
- 久保正秋 (2002) 「教師」か「コーチ」か—「運動部活動の指導」と「コーチング」の問題点—. 体育学研究, 47: 485-490.
- 久富善行 (2008) 教師の専門性とアイデンティティ—教育改革時代の国際比較調査と国際シンポジウムから—. 勁草書房.
- Loughran, J. J. (2004) A history and context of self-study of teaching and teacher education practices. In: Loughran, J. J. et al. (Eds.) *International handbook of self-study of teaching and teacher education practices Vol. 1*. Springer, pp:7-39.
- Loughran, J. J. and Berry, A. (2005) Modelling by teacher educators. *Teaching and Teacher Education*, 21: 193-203.
- ロックラン, J. 著. 武田信子監修 (2019) J.ロックランに学ぶ教師教育とセルフスタディ. 学文社.
- Lunenberg, M., Korthagen, F. and Zwart, R. (2011) Self-Study Research and the Development of Teacher Educators' Professional Identities. *European Educational Research Journal*, 10: 407-420.
- 前田智香子 (2009) 専門家の職業的アイデンティティ形成の研究に必要な視点. 文学部心理学論集, 3: 5-14.
- 松田啓示 (2010) 調査研究からみえてきた教師の職能成長. 梅野圭史ほか編, 教師として育つ—体育授業の実践的指導力を育むために. 明和出版, pp.169-174.
- メリアム, S. B.: 堀薫夫ほか訳 (2004) 質的調査法入門—教育における調査法とケース・スタディー—. ミネルヴァ書房. <Merriam, S. B. (1998) *Qualitative research and case study applications in education* (2nd ed.) . Jossey-Bass. >
- 宮下一博・田辺敏明・小柳晴生・岡本祐子・上地雄一郎・磯部修一・沢田章子・森川早苗 (1984) 外国 (ことに米国) における同一性研究の展望—職業的同一性に関する研究—鐘幹八郎ほか編, *アイデンティティの研究の展望 I*. ナカニシヤ出版, pp.154-167.
- 宮田靖志 (2015) 3. プロフェッショナルリズム教育の10の視点—特集: プロフェッショナルリズム教育の現在とこれから—. 医学教育, 46(2): 126-132.
- 文部科学省 (2020) 学校における働き方改革推進本部 (第4回) 議事次第. https://www.mext.go.jp/content/20200901-mxt_kouhou01-100002242_7.pdf, (参照日2020年10月10日)
- Murray, J. and Trevor, M. (2005) Becoming a Teacher Educator: Evidence from the Field. *Teaching and Teacher Education*, 21(2): 125-142.
- 日本保健科教育学会 (2017) 保健科教育法入門. 大修館書店.
- 新村出 (2008) 広辞苑 (第6版). 岩波書店.
- 岡村美由規 (2019) 欧米の高等教育機関の教師教育者に求められる資質・能力に関する議論動向と問題点—教師教育者の専門性の高度化と専門職化運動との逆説が示唆するもの—. 広島大学大学院教育学研究科紀要第三部, 68: 45-54.
- 大石千歳 (2015) 体育大学学生のスポーツマン的アイデンティティと職業決定ステータスが教職志望動機に及ぼす影響—全国大会出場経験の有無による比較検討—. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 50: 11-19.
- 大石千歳 (2016) 本学体育学部学生の保健体育科教員志望動機に中学校・高等学校の運動部活動指導者である教員が及ぼす影響. 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 51: 1-11.
- 小柳和喜雄 (2018) 教師教育者のアイデンティティと専門意識の関係考察—Self-study, Professional Capital, Resilient Teacherの視点から—. 奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校教育実践研究」, 10: 1-10.
- Ovens, A. and Fletcher, T. (2014) *Self-Study in Physical Education Teacher Education: Exploring the interplay of practice and scholarship*. Springer.

- 小沢一仁 (2020) 自己理解のためにエリクソンのアイデンティティ概念を捉え直す—主観的視点から斉一性と連続性に焦点を当てて—. 青年心理学研究, 31 : 91-108.
- Poucher, Z.A. and Tamminen, K. A. (2017) Maintaining and managing athletic identity among elite athletes. *Journal of Sport Psychology*, 26: 63-67.
- Schuck, S., and Russell, T. (2005) Self-study, critical friendship, and the complexities of teacher education. *Studying Teacher Education*, 1(2): 107-121.
- 須甲理生・四方田健二 (2013) 体育教師が有する教師観に関する一考察—運動部活動指導者としての教師観から授業者としての教師観へ—. 日本女子体育大学紀要, 43 : 41-50.
- Swennen, A. and Van der Klink, M. (2009) *Becoming a Teacher Educator: Theory and Practice for Teacher Educators*. Springer.
- Swennen, A., Jones, K, and Volman, M. (2010) Teacher Educators: Their identities, sub-identities and implications for professional development. *Journal for Professional Development in Education*, 36(1): 131-148.
- 豊田則成・中込四郎 (2000) 競技引退に伴って体験されるアスリートのアイデンティティ再体制化の検討. 体育学研究, 45 : 315-332.
- 渡邊ひとみ (2020) 青年期のアイデンティティ発達とネガティブ及びポジティブ経験に見出す肯定的意味. 心理学研究, 91 : 105-115.
- 吉津紀久子 (2001) 職業的アイデンティティの発達の研究(2). 教育科学研究年報, 27 : 23-29.
- 全国教育系大学剣道連盟 (2014) これならできる剣道—武道必修化時代の“五輪書”—. スキージャーナル株式会社.

Self-Study by a Novice Teacher Educator Who Specializes in Kendo — The Link between Athletic Identity and Educator Identity —

HAMAMOTO Aiko

Abstract

This study is a self-study by the author (Hamamoto), who is a novice teacher educator specializing in Kendo, on the relationship between athletic identity and educator identity. The research method consisted of keeping records of interactions and interviews with critical friends specializing in the pedagogy of physical education and teacher education. The unstructured interviews related to this self-study were transcribed and summarized as a narrative. Hamamoto developed an athletic identity and an educator identity owing to her childhood passion for Kendo and her experience in the education industry. These identities gradually evolved and solidified as she gathered more experience, achieved higher professional positions, and gained more expertise. When she became a teacher educator, both identities integrated and developed into a single professional identity—a physical education teacher educator. In addition, Hamamoto was able to recognize the importance of integrating both identities by re-examining her athletic identity and educator identity through this self-study and considering the relationship between them. PE teachers and PE teacher educators are exercise and sports specialists as well as education specialists. The challenges of a PE teacher educator who trains other PE teachers have also been clarified with a focus on how to connect both specialties.

Keywords: Kendo, Teacher educator, Physical Education, Identity, Self-Study